プロローグ　首里城と沖縄戦

軍都となった首里

首里城が米軍の目に留まったのは、１９４４（昭和19）年10月10日の沖縄大空襲の日だった。それまでも米軍は、高度1万メートルから空中写真撮影を行ない日本軍の軍備状況を偵察していたが、雲により撮影が難航した。米軍偵察行動は、主に戦備の情報収集であったが、この日の大空襲は、偵察をかねた民間人居住地区への無差別爆撃であった。南西諸島一帯の大空襲は、それまでの日本軍の作戦計画に一大転機をもたらす引き金となった。

この日、米軍情報部隊は、空襲の合間をぬって沖縄全域にわたる空撮を行なった。その後米軍は、空中写真を詳細に分析し全島の軍事施設の割り出しを行なった。分析の結果、首里は重要な軍事施設が多数ある軍事要塞地であることが判明した。そこで首里地区は、一躍米軍の「攻撃目標地点　首里　第17」に組み込まれ、古都首里は軍事要塞地としてあつかいが変わることになった。

「沖縄10・10大空襲」後、第9師団が沖縄から転出することになり、第32軍司令部はそれまでの海岸部で敵を攻撃する「水際作戦」を変更し、敵を上陸させ一日でも長く戦う「戦略持久作戦＝地上戦」に大転換した。その後軍は、地形を利用した陣地の構築に全力を挙げ、最も大きな築城が、首里城地下深く掘削して作られた第32軍地下司令部壕（ごう）であった。１９４４年12月から司令部壕構築が始まり、古式ゆかしい首里のたたずまいはみるみるうちに変化を遂げ、大勢の軍人が行きかう軍都に様変わりした。

ところで戦前の首里は森の都といわれ、亜熱帯植物が街並みを覆い、野鳥がさえずるのどかな旧都であった。１９４０年1月、三度目の沖縄を訪問した美術評論家の柳宗悦（やなぎむねよし）は、暗い世相の中で異彩を放つ沖縄文化に触れ、こう述べている。

「屋根、その赤瓦と漆喰（しっくい）の白、（中略）遠くに開ける広々とした海原、その碧緑（へきりょく）の色（中略）。たとい衰えたりとはいえども、首里はまたとない首里である。（中略）首里ほど人文と自然とによき調和を示し、独自の風格に統一された都市がどこにあろうか[*1]」

首里の高台から眼下の首里や那覇の街を見下ろすと、空の青、家並みの赤や白、さらに青緑

色の海原が見事に連なっていた。とくにサンゴ礁に囲まれた沖縄の海は、いつも変わらず青みがかった緑色をしている。これら街並みや景観が、標高158メートルの小高い丘の上に立つ首里城と、総延長1キロに及ぶ石積みの外壁から眺められた。このときさらに柳は、詩人は首里に立ち美観を歌え、画家は力強く筆をとり、壮大な眺めを描けと叫んでいる。

しかし、戦争は首里を大きく変えた。

沖縄戦と洞窟陣地とは切っても切り離せない関係にある。洞窟陣地とは、敵の空襲や艦砲射撃を避けるため、地下に掘られた壕のことである。戦場の日本軍陣地は、坑道と呼ばれるトンネルで結ばれ、精巧なアリの巣穴のように造作された。

米軍の沖縄上陸は1945年2月から3月にかけてで間違いないと判断した第32軍司令部は、米軍の大型爆弾にも耐えられる司令部壕構築を計画し、琉球王国時代に築かれた首里城の地下に白羽の矢を立てた。軍事的地政学から首里城地下は司令部に最適だとされ、かくして1945年3月末、約4カ月間の突貫工事でトンネル工事はほぼ完了した。地下30メートル、長さは直線にして約400メートル、総延長は1キロ、司令部中枢機能は首里城本殿近くに置かれた。さらに堅固な壕の内外には、千人規模の通信隊員が配置され、無線や電話、伝令で司令部壕を支えた。

沖縄戦を指揮する長勇参謀長は、ここを「天の巌戸戦闘司令所」と命名している。おそらく長参謀長は、『日本書紀』に出てくる洞窟神話と地下司令部壕とを結びつけ、この壕が神宿る神々しい陣地でもあるかのように命名したのだろう。

一方、首里攻略に当たった米第10軍司令官バックナー中将は、その複雑で堅固な構造を評してここを「迷宮（labyrinth）」と呼んだ。

1945年4月1日、沖縄本島で捕虜第1号となった朝鮮半島出身者で東京帝国大学卒の戦場離脱者は、日本軍司令部が首里城地下にあることを暴露した。4月18日、米海兵隊航空隊の「ガラガラ蛇」軍団が、焼夷弾・ロケット弾で首里城を攻めたが、目標とした城の炎上・崩落には至らなかった。その後、砲爆撃が繰り返され、4月29日の天長節までに首里城の建築物はついに焼失した。

しかし、地下司令部壕だけはいまだ健在だった。

5月12日の米軍の参謀会議の席上、日本軍は沖縄のどこで戦闘を終えるつもりなのかが話し合われた。一人の参謀は、日本軍の南部撤退の可能性を述べたが、バックナー中将は、日本軍

は今も地下要塞にしがみついており、ここで最後を迎えるだろうと述べた。

米軍が攻めあぐねた第32軍司令部壕

5月半ばから米軍は、第32軍司令部壕の占拠を目指し、首里を包囲する作戦に出た。しかし米陸軍2個師団は、豪雨と日本軍の攻撃により首里の手前数キロで立ち往生し、作戦は行き詰まってしまった。第1海兵師団も、首里に至る高地や丘陵斜面で日本軍と接近戦を展開するも、攻撃が停止してしまった。

第10軍の苦戦を聞いたフィリピンにいるマッカーサー将軍は、5月20日、沖縄に作戦参謀を送り、特別メッセージをバックナー中将に伝えさせた。そこでは、「頑張ろう！　戦況がいかに困難であろうとも弱音をはくな」[*2]と激励した。

豪雨と泥濘（でいねい）で苦しめられた米軍は、日本軍との近接戦闘でも苦戦を強いられていた。やがて米兵の多くに、首里は占領できるのだろうかと不信感も芽生えてきたさ中、突如として第32軍司令部が南部に撤退したとの情報が伝わった。日本軍は、豪雨をつき5月25日から27日にかけて首里から撤退を開始した。第1海兵師団が首里高地に突入したのは、5月29日の早朝であった。しかし一部の日本軍が首里に留（とど）まっており、すぐには占拠できなかった。バックナー中将は、米軍の首里城到着は2日遅かったと悔しさを隠しきれなかった。

地下司令部壕の破壊作戦

5月25日から27日にかけて米軍は、第32軍地下司令部壕を押しつぶそうと戦艦ミシシッピを繰り出し首里城砦（じょうさい）の破壊作戦を行なった。戦艦から305ミリ超大型砲弾が発射され、城壁部分は完璧に破壊された。首里城は土台から消えてなくなったが、首里撤退までの約2カ月間、地下司令部壕には、1000人以上の将兵が立てこもり、米軍に対し憎悪をつのらせていた。艦砲射撃の砲弾は、地鳴りを響かせ、トンネルの壁は崩れ、大地震のように内部は揺れ、濁流が流れ込んだ。第32軍航空参謀の神直道（じんなおみち）中佐は、大本営への連絡要員として5月30日ごろに沖縄を脱出したが、地下司令部壕内は人々の肌と肌とが触れ合い、熱気や吐息で近くすらかすんで見えなかったという。それでも将兵らは、壕内にへばりつき、艦砲射撃や空爆に耐えた。

これに対し、なおも抵抗を続ける日本軍に業を煮やしたブルース将軍は、5月28日の参謀会議で、抵抗の拠点となっている地下壕を焼き払うためにガソリン投入による地下司令部壕の完全消滅作戦を提案している。この残虐極まる焼却作戦は、硫黄島（いおうとう）で実践済みであった。ガソリン投入作戦は、取りやめになったが、6月1日、地下司令部壕は完全に米軍に制圧された。首

里城は残骸と化し、首里一帯は腐敗した死体が悪臭を放ち、米軍全軍に立ち入り禁止措置がとられた。

艦砲射撃で退路を断つ

第32軍地下司令部壕の破壊作戦に最も貢献したのは、陸上部隊よりは、戦艦、駆逐艦などの艦砲射撃であった。とりわけ、「戦艦ミシシッピの圧倒的火砲が、首里城を瓦礫化させた[*3]」と戦果が称えられた。

さらに地下司令部壕や首里一帯の陣地を脱出した兵士らに、追撃を加えたのが戦艦ニューヨークなどである。偵察機の連絡を受け、5月26日、戦艦ニューヨークら3隻は、南部への退却路や橋を目掛け集中砲撃を加えた。偵察機からは、民間服を着た大勢の日本兵が路上に倒れていると連絡が入った。首里城を攻める第1海兵師団司令部も、26日とその翌日、同艦に感謝電を伝えている。

「今日（27日）の午後の迅速な砲撃に喜びと感謝を申し上げる。おかげでニップス（日本兵）野郎は、（民間人に化け）着物姿で路上にたたきつけられている[*4]」

米軍が見たのは、艦砲射撃にやられ、道端に四散する多くの老幼婦女子であった。それまで

首里の安全な場所から戦争を指導した者たちは、今度は追われる身となり南部へと敗走した。人が人でなくなったのが沖縄戦だと言われるが、このときの日本軍の人命軽視主義、米軍の人命破壊主義の戦いは戦争でしか示し得ない人間の仕業であった。

首里城地下司令部壕の実体解明を

首里城を陥落させた米軍はただちに壕内に入り、地下司令部壕を調査した。そこには焼却が間に合わず放置されたままの日本軍情報書類が山ほど残されていた。重要記録類は、ただちに米本国に送付され、ワシントンの情報担当者は、部内で号外を出して狂喜した。あまりにも精巧な壕の構造に驚いた米国の軍事史研究家は、自給自足の仕組みを備えた地下司令部壕は、第一次世界大戦の塹壕システムを越えていると評価し、トンネル内の生活空間は、軍艦の居住区と全く同じだと述べている[*5]。

そして戦後。

長年の準備期間をかけて1992年に再建された首里城には、年間約300万人が世界遺産の首里城（正しくは首里城跡）を一目見ようと押しかけた。再建なった首里城はまた、沖縄県民

の精神的シンボルとして受け入れられ、平和な時代をかたどる鮮やかな朱色の彩色が人目を引いた。だが、首里城は２０１９年10月に火災に遭い再び消失する不幸にみまわれた。

首里城が燃えて8カ月が経った２０２０年6月、「第32軍司令部壕の保存・公開を求める会」が発足した。首里城地下司令部壕の意味を問う市民運動が、初めて立ち上がった。同会の幹事の方から首里城の実体について筆者は意見を求められ、押し入れに眠ったままの英文記録を急いで取り出した。考えれば戦後80年近く、誰も地下司令部壕の中枢部に入ったことはなく、実体は地下深く埋もれたままである。はやる気持ちを抑えつつ、一枚一枚米軍記録や資料を読み返す作業が続いた。

そんな中、米軍参謀会議の日誌から、米軍が、地下壕にこもる第32軍司令部と住民救出に関わる協議を検討していたという新事実が分かった。さらに米海兵隊が初めて首里城に入ると、付近の壕から4人の女性が現れたと米側記録にあり、そのうち2人は英語が話せたという。彼女らは、堂々とタバコを吸いながら城跡の残骸の上に座っていたともある。首里城本殿がいつ燃えたのかについて、多くの証言があるが、新たな記録や証言を通じて月日が特定できたことも貴重な発見だ。日米両軍の記録を読み込み、照合して初めて地下司令部壕をめぐる新たな事実が見えてきた。

現在沖縄県の第32軍壕調査が続いており、爆破で閉じられ、埋もれたままの司令部壕も、あと一息で部分的に開けられるまでになった。地下司令部壕を開放するのは、当時の第32軍司令部がいかなる戦争を仕掛け、それが内外にどのような影響を与えたのかを検証するものでなければならない。それはまた泥濘の中に棲息し、兵士や住民を死に追いやった魑魅魍魎の実体を暴き、さらすものでなければならない。

ここは嘘や偽り、虚飾と虚勢に長けた軍首脳部が生き永らえた場所である。民間人や兵士らの叫びや悲しみを無視し続け、死をもって国に殉ずることを最高の美徳とみなした沖縄戦指導者の生活の場であった。改めて第32軍首里城地下司令部壕に向き合い、おごりたかぶった当時の司令部壕や司令部の人々に決着をつけ、復元される首里城と共に首里台地を平和の聖所に変えていく努力が求められている。

ちなみに国内の他の地下壕では、長野県の「松代大本営」や神奈川県日吉の「連合艦隊司令部」等が知られているが、実戦にはいたらず終戦を迎えている。これに対し、第32軍首里城地下司令部は、国内最後の戦闘司令部であった。崩壊した首里城から追われるように沖縄南部に下った司令部も、壮絶な最期を迎えている。

首里城の再建が進められている現在、日本軍がなぜ司令部を首里に置いたのか？　地下司令

部壕の役割や構造はどのようなものであったか？　米軍はどう地下司令部壕を攻略したのか？

これらについて日・米軍資料、とりわけ米海軍記録を紐解（ひもと）き、首里城台地でいかなる戦闘が繰り広げられたかを明らかにしたい。さらにまた、近年南西諸島の基地化が進んでいるが、これは沖縄戦の根のところで結びついていることも指摘したい。